

みやま文庫五〇周年の歩みについて

松 島 榮 治

一 みやま文庫の発足

発足 高度経済成長の最中、新しい時代の到来を予想し、文化活動の重要性を認識した篠原秀吉(上毛新聞社長)、黒沢得男(県教育長)、吹山保忠(毎日新聞前橋支局長)の三氏の

- (1) 出版事業の少ない、群馬県の出版事業を盛んにしたい。
- (2) 研究者の発表の機会をもうけたい。

(3) 営利を抜きにした全県的な文化活動としたい。
との提唱に基づき、当時の県議図書室運営委員と県議会図書室長萩原進が中心となって、計画の具体化が推進された。これを受けて、県知事神田坤六ほか一〇人からなる発起人会が組織され、やがて全県的な呼びかけも行なわれ、昭和三十六年(突)三月前橋市労使会館ホールで、発起人会と創立総会が行われ、ここに「みやま文庫」は発足した。その名称は、群馬県を象徴する赤城・榛名・妙義の三山の名を採り「みやま」としたものであった。その体裁は、あくまで普及を目的

とし、小型(B6版)で携帯して便利な叢書本とすることになった。また、その目指すところは、商業ペーすに乗らない貴重な郷土に関する研究や著作を、平易に興味深く編集して県民に頒布し、併せて県内の文化の推進に資そうとするものであった。そのため、みやま文庫は、県民を中心とした会員制によって組織され、会費は年額制とし年四巻配布することとなった。

組織・運営 創立された事務局は県立図書館内に置き、役員としては、知事の職にあるものを会長とし、副会長のうち一名は県教育委員会教育長を委嘱することとした。運営上の組織としては、運営委員会は、県・議会ならびに教育委員会事務局の関係者により組織され、会の財政、事業の運営に当たるとし、編集委員会は学術経験者など組織し、文庫の企画・編集に当たるものとした。また、県議会図書広報委員会を中心に議会事務局・県行政機関の代表者を含めて理事会を編成し、総会に代わる機能を果たすこととした。

なお、図書館内に設けられた事務局には、局長には図書館長が委嘱され、局長をはじめとする職員には、県行政職員が出自、または退職職員が委嘱されたり、臨時職員の採用によって日常業務を遂行するなど、県議会・県行政執行部が主導し民間を巻き込んだ県行政執行機関外局として発足した。

二 刊行された「みやま文庫」

群馬県は、豊かな自然に恵まれ、さまざまな輝かしい歴史と文化を築き上げてきた。この伝統ある本県の発展の姿を、多くの県民の方々に、正確な情報を提供しそして理解して頂くことは、県民の文化と教養を高め、ひいては地域文化の振興に寄与するものと思われる。

このような観点に立って、みやま文庫は、発足以来五十年を経過し、これまでに歴史、自然、民俗、産業、文化、芸術、スポーツなど多彩な図書を刊行し、多くの会員や図書館など文化的機関に頒布してきた。その冊数は、五十年を経過して二〇〇冊に達した。その内容については、既に平成十六年一月、それまで刊行された一七一冊について、ある県内の団体が、その機関紙の中で、ぐんまの新機軸として取り上げ、それぞれその冊子について、その表紙と概要をカラー刷で特集するなどして、この事業を群馬の文化活動として評価した。



写真1

みやま文庫の出版事業は、その後も刊行を継続し、平成二十三年には創刊五十年を迎えた訳だが、その間の刊行物について、その内訳についてみると、例えば、第一巻「赤城ふるさと山」にみられるように、単に自然としての赤城山ではなく、志賀直哉の赤城山回想「焚火のころ」を巻頭に、赤城山の信仰、民俗、人文地理など山と人との繋がりについて記述し、複数の学問分野に跨るものもあり、一概に律することとはできないが、ごく大まかにその内容を学問的分野別に整理するとおおよそ次のとおりとなる。

- ・ 歴史的分野 II 群馬の時代史、行政の枠を超えた地域史、群馬の産業と文化など五四冊
- ・ 文学的分野 II 群馬の近代文学の人と作品、群馬を舞台とし

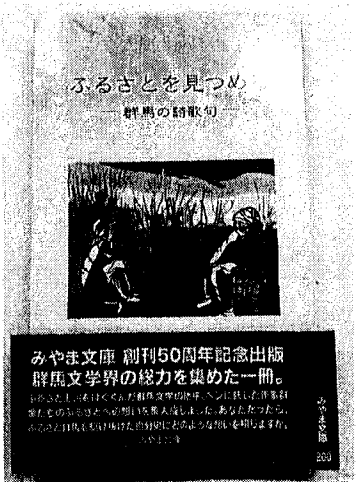


写真2

た小説など三六冊

・地理(風土) 的分野Ⅱ群馬の風土とくらし、赤城・榛名など
と人々のくらしなど二四冊

・自然的分野Ⅱ上毛三山、尾瀬の自然、利根川の原流、谷川
連峰の自然、地学散歩など一九冊

・民俗的分野Ⅱ群馬のくらし、群馬の地域的なくらしぶり、
民俗の神々、群馬の民話など一九冊

・芸術(芸能) 的分野Ⅱ群馬の郷土芸能、上毛書家列伝、群馬
の社寺彫刻、群馬の近代美術など一一冊

・観光(産業) 的分野Ⅱ富岡製糸場、群馬県農業史、上州の観
音札所など九冊

・スポーツ的分野Ⅱ群馬の高校野球、群馬のスキーとテニス

文庫の歴史分野が多く占めるのは、こうした時代的背景を反映したものと思われる。特に近年「ぐんまの昭和史」上・下(上巻第一七〇巻・下巻第一七八巻)など明治以降のいわゆる近現代史に関わる著作が目立っている。とかく、近現代史軽視の歴史学習の中で、こうしたみやま文庫の存在は評価される。このような状況の中、最近注目されるものに手島仁著の「中島知久平と国政研究会」上・下(上巻第一八〇巻・下巻一八九巻)がある。この著作は、平成十九年度日本法制学会から学会賞(奨励賞)が著者に贈られた。みやま文庫の存在が学会からも認められたことにもなる。

また、歴史的分野の中目立つものに、「〇〇史帖」とされるものがある。第一二二巻「佐波伊勢崎史帖」にはじまり、第二〇五巻となる「碓氷・安中史帖」を含めて一三冊を数える。この刊行は、戦後新しい歴史認識から、各市町村単位で歴史の編纂を行ってきたが、そうした行政単位の枠を超えた地域史を対象としたもので、これまでみられなかった地域史として注目されるものである。

歴史的分野に次いで多いものに文学的分野がある。この中で目立つものに、郷土出身文学者評伝シリーズがある。このシリーズは、第二三巻の「詩人萩原朔太郎」に始まり、第六五巻「山口寒水 その人と作品」、第六九巻「暮鳥・拓次・恭次郎」、第七二巻「鬼城・霽余子」、第七八巻「泰一郎・きち・

など七冊

・その他の分野Ⅱ近代群馬の女性たちなど一八冊となる。

そこで改めて、分野別に概観してみることしよう。まず歴史的分野についてみると、その対象となる地域は記すまでもなく群馬県とされるいわば地域史である。地域の歴史は戦前においては、郷土史とも言われ、とかくお国自慢的な内容に飾られ、その研究法は科学性に欠けることが多かった。また、あくまでも限られた地方の歴史であり、全体史である日本



写真3

本の歴史とは無関係のものとして扱われ、総じて次元の低いものとされてきた。しかし、戦後の新しい歴史学の動向と発展の中で、質の高い地域の歴史研究の成果の上に全体史即ち日本史が成立するの考えから、地域の歴史研究とその成果が重要なものと認識されるようになった。みやま

雅休」、第九〇巻として「元吉・秀雄」と続き、間において、第一三八巻に「土屋文明 人と作品」、第一四四巻「群馬の昭和の詩人 人と作品」、第二五八巻「群馬の昭和の歌人」と継続され、昭和四十一年に始まり平成十二年に終結するまでの三十四年間わたって九冊の著作によって、群馬の近代文学界を彩る詩人・歌人・俳人について、その人と作品について紹介した。

なお、みやま文庫創刊五〇周年・二〇〇号を記念して企画された「ふるさとを見つめる―群馬の詩歌句―」では、群馬の多くの優れた文学者の陰に、珠玉の作品を残しながらも、一地域或いはジャンル内の存在にとどまっている文学者に目を向け、県内を中毛、西毛、北毛、東毛の四地域に分け、詩人三一一名、歌人二九名、俳人一四名、併せて七四名について、三七名の関係有識者によって執筆された。

ここに、みやま文庫は、「花袋とふるさと」(第二九巻)、「みやま随筆」(第六四巻・第八五巻)などと併せて、群馬の近代文学の動向について学ぶバイブル的存在として全国的にも高く評価されている。

また、異色の刊行物に復刻版とされるものがある。「群馬県営業便覧上・下」(上巻第六〇巻・下巻第六二巻)、「伊香保志上・下」(上巻第一〇九巻・下巻第一一一巻)、「群馬県案内上・下」(上巻第一二八巻・下巻第一二九巻)、などがある。これらは、か



写真4

つて名著とされたものであるが、現在容易に手に入れることができないうものであるが、現在十分に通用するものである。例えば、「上毛新聞」で本年一月十一日に始まりその後不定期に連載され現在に至っている。ようこそ群馬へ」「観光一〇〇年」は五六回を数えるが、その内容は、本みやま文庫「群馬県案内(第二八巻・第二九巻)」が参考文獻として引用されているほどである。

ところで、これまで分野によつて多小の差はあるが、これほどまでに群馬の自然や文化などについて、まとめて記述し紹介されたものがあつただらうか。群馬を知る『百科事典的』書物と言われたり、群馬の『知的財産』、あるいは「群馬交響楽団」と並ぶ、群馬が全国に誇る文化事業とされる所以はここににある。

なお、こうした文化的事業を実施している県は、全国的に

年頃にかけてのいわゆる「バブル経済」とされる経済の好況が反映していたものとも考えられるが、それとは別に、群馬県の新しい時代の到来を予想しての文化活動を重要視した積極的な施策があつたものみられる。その一つは、昭和四十四年「明治百年記念式典」が行われ、これを機に後世に残る優れた記念事業が計画され、続いて、昭和五十六年には、群馬県議会在「文化県群馬の宣言」を決議し、めざましい経済発展の中にあつて、県は、教育・文化振興への方向性を打ちだした。

これを受けて群馬県では、豊かな群馬の自然や文化に関するいわゆる地域図書出版が盛んとなり、自治体の出版では、昭和四十九年『群馬県史』の編纂事業がスタートし、平成十九年に完結という長い年月をかけて、資料編二七巻、通史編一〇巻という膨大な修史事業を完成、他に編纂過程における調査結果など収録した「群馬県史研究」とする三五冊もの研究雑誌の刊行を行った。また、民間においては、本紙「群馬文化」の発行があつた。群馬文化は、古く昭和三十二年に発足した「群馬文化の会」を母体としたものであつたが、昭和五十六年母体を発展的に改称して「群馬地域文化研究協議会」とし、地域史研究季刊紙発行の体制を整え、平成八年には会員数五三〇人の組織にまで発展し、平成二十一年には三〇〇号記念誌を刊行するなどして現在に至っている。

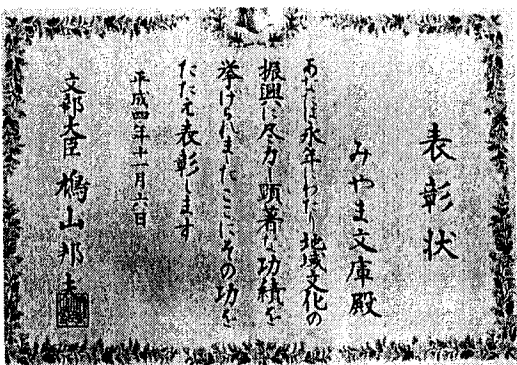


写真5

も珍しく、現在知られているのは、岡山県の「岡山文庫」、兵庫県の「のじぎく文庫」のみである。このためみやま文庫は、平成四年には、文部大臣から地域文化の振興に功労があつたとして、表彰を受けたほどである。

三 みやま文庫五〇年の歩みの中で

昭和三十六年会員制の組織として発足したみやま文庫は、発足時の会員は、三〇〇名前後とされているが、十六年を経過した昭和五十二年には、個人会員三、四五〇人、団体会員約三五〇団体、個人・団体会員併せて三、八〇〇にも達し、会は極めて順調に発展した。その背景には、昭和三十年代後半に始まる高度経済成長とそれに続く、昭和六十年代から平成五

なおこの他、昭和四十八年には「歴史散歩の会」が隔月刊の機関紙として「群馬歴史散歩」を、同じ年「あさを社」は月刊総合文化誌として『上州路』をスタートさせた。そして、昭和五十五年には「群馬評論社」が季刊紙「群馬評論」を刊行した。また、単行本としては、昭和六十年「上毛新聞社」が「上毛文庫」の刊行を開始した。

このように、昭和五十年代から六十年代にかけて、群馬県では自治体を始めた公共機関や出版社や民間によつて、単行本や雑誌による地域文化研究の出版事業は活況を呈したが、みやま文庫は、まさにその先駆的役割を果たしたものである。

ところでこうした地域文化研究の出版事業の盛況は、昭和の末期から平成にかけてこれまで予想もしなかつた状況に遭遇した。それは書物の刊行を前にして原稿が揃わないという状況であつた。その主な理由は需用と供給のバランスの問題で、供給者としての原稿の執筆者の不足で、みやま文庫としても例外ではなかつた。その主な原因についてみると、例えば、群馬県史編纂事業における多数の執筆者動員をあげるこゝとができる。前にも記したように群馬県史は、資料編二七冊、通史編一〇冊の三七冊、他に群馬県史研究とされる冊子三五冊を十九年間とされる期間内に刊行すると言ふ群馬県未曾有の修史編纂事業であつた。このため、一定期間多くの執筆者

を必要とした。「県史編纂事業の基本事項」によれば、県史の調査、執筆に当たる専門委員・調査委員は、一七三名にも達し、その殆どは群馬県に在住する老若併せての研究者であった。こうした、状態は当然各種の地方出版事業に影響を及ぼした。発足以来順調に刊行を続けてきたみやま文庫をはじめ、本紙群馬文化なども「原稿不足」とする事態を招き、地方文化誌定期発行に危機的状態を現出した。

みやま文庫は、その規約によつて、その事業として「みやま文庫」を刊行するとし、会費は「年額四〇〇〇円とし（会員一冊一〇〇〇円）」と定めている。これを受けて、「編集基本方針」では、配本は年間四冊とし、発足以来年間四冊の配本を實施してきた。ところで、昭和六十年代から平成初期にかけて、予定通り原稿が揃わず刊行が進まず、年間四冊の配本も不可能な事態に陥った。例えば、昭和六十三年度についてみると、第二回配本の第一一巻「伊香保志」(下)、第三回配本の第一一巻「山村暮鳥」、第四回配本の第一一四巻「諸國道中金の草鞋」などは、共にその印刷は平成元年三月二十日、発行は三月三十日とされており、六十三年度第二回・第三回・第四回の配本は、六十三年度には実施できなかったものと思われる。こうした現象は、昭和六十三年度だけに止まらなかった。平成四年度の第三回配本の第一一八巻「群馬県案内(上)」、続く第四回配本の「群馬県案内(下)」は、共に平成五年三月三

執筆不足のため原稿が揃わず窮余の一策として採られた復刻本の刊行も、みやま文庫設立に沿った文化活動としての役割を果たしたものと見えよう。こうしてみやま文庫創立以来の難局を編集役員と事務局が一体となって乗り切ることができたのである。その業績は大きい。

四 みやま文庫の現状とその対応

みやま文庫は、運営上一時大変困難な時期を迎えたが、これを何とか乗り切り、その後、一見順調な活動を展開してきたようだが、近年会員制組織としては危機的な状況を迎えた。それは会員数の減少という現象であった。先にも記したように、文庫成立の当初三〇〇とされた会員数は、十六年を経過した昭和五十二年のピーク時には、個人・団体会員数併せて三、八〇〇を超えた。しかし、その後は減少傾向に移り、平成八年には二、九〇〇となり、更にその後も減少傾向は続き、平成二十二年四月現在の団体会員を含む会員数は、一、三七六となり、ついに会員組織を維持するに必要とされる最低会員数とされる一、五〇〇を割るという正に危機的状況を迎えた。

ところで、こうした危機的状況は必ずしも、みやま文庫だけのことでなく、現在の出版界を取り巻く社会的状況とみられる。例えば、群馬県内にあってみやま文庫と類似した地域

十日発行とあり、その配本は平成四年度中にはなされなかったものとみられる。執筆者の不足が原稿不足をもたらした結果、年四冊の刊行・配本が一時的に停滞したものである。こうした、定期的刊行・配本の遅滞に対して、事務局をはじめ編集委員会は、大変な苦勞をされた模様である。そうした状況の中で採られた苦肉の対応が、書き下ろしの著作でなく、すでに刊行された著作の復刻であった。いま、みやま文庫出版目録を概観すると、復刻本あるいは復刻本に準ずるとみられるもの一四冊が数えられ、その内、一二冊が昭和五十年から平成四年にかけて集中している。復刻本にかけた当時の事務局や編集委員の尽力の様子が偲ばれる。ところで、復刻本の解決のようにみられるが、今日からみるとそれが適切な方法であったと評価される。それは、かつて名著とされ多くの人々に愛読されたが、現在容易に見られない書物に接する機会を設けたもので、その益することは大きい。前にも触れたが、平成四年度に刊行された第一二八巻・第一二九巻の「群馬県案内(上)(下)」は、本年群馬県で開かれる大型観光企画にあたり、上毛新聞の「ようこそ上州へ 観光一〇〇年」企画、連載は、みやま文庫「群馬県案内」に拠る所が多い。過去を知り現在に活かすための資料としてみやま文庫の果たす役割は大きい。

を対象とした文化的総合雑誌についてみると、

①「上州路」(あさお社)

上州路は、昭和四十八年総合文化誌として創刊された月刊誌であったが、通巻四〇〇巻をもって平成十九年多くの人達に惜しまれながら刊行を終えた。

②「上毛文庫」(上毛新聞社)

上毛文庫は、当みやま文庫と同じく、会員制の出版事業として、昭和六十年に創刊され、一時停滞したが平成九年再スタートしたが、平成十六年通巻五二巻で刊行を終えた。

③「群馬評論」(群馬評論社)

群馬評論は、昭和五十五年同人による季刊誌として発足したが、平成十六年通巻一〇〇巻で刊行を終えた。

以上、出版業界の厳しい状況を反映したものとみられるが、その原因としては、

①若者を中心とした活字離れ現象

②「電子書籍」の普及とされる社会的な背景

などが考えられるが、みやま文庫としては、さらにこの他の要因として、

①会員の高齢化による会員数の減少(脱会と死亡)

②厳しい経済状況による自治体の予算の削減(公立教育・社会教育団体の脱会)

などがあげられる。

みやま文庫会員の減少の原因は、現在の社会的背景と、みやま文庫のもつ特殊な条件によるものと考えられる。こうした状況打開には容易でないものを感じる。しかし、この状況を放置することはできない。このため、現在みやま文庫としては、事務局の経費節減のための創意工夫、編集委員会・運営委員会あげて、より県民が関心を持つテーマを選び、県民のためになるより良い書物の刊行に努めるほか、新たな打開策としては、会員による組織である以上、従来の形の普通会員の増強に努めることは勿論であるが、次のようなことに配慮していく必要があるのではないか。

(1) 刊行は、会員頒布を原則とするが、需用を見込んで増刷を行い、県内の博物館・美術館や主な書店などで委託販売し、会員外頒布を実施している。平成二十二年度には九二九冊の売上があったが、こうしたこれまで行われなかつた会員外頒布をさらに進め、会員減少による収入減を補う。

(2) これまで会員の殆どは、県内に在住する群馬県民であったが、最近、県外の大学関係者などの個人会員が増加している。平成二十二年度の県外個人会員は、東京 11 一五名、埼玉 11 九名、千葉 11 四名、栃木・茨城 11 三名、他に北海道・愛知・奈良・岡山・大分県に各一名がおり、

全国的に会員網が広がりつつあるように見受けられる。こうした状況を踏まえて、今後さらに県外会員の増加に向けて努力する。

(3) 現在の会員についてみると、女性会員は希少である。また、高齢者が圧倒的に多く若年令層は少ない。みやま文庫の成立とその後の展開の中で止むを得ないものと考えられるが、今後を展望した時に放置できないものと思われる。女性と若年令層の会員加入を積極的進める必要がある。そのための方策としては、女性と若年令層にみやま文庫執筆の機会を設け、みやま文庫の存在を実感して頂くように配慮する。

昭和三十六年創刊されたみやま文庫は、群馬県を理解する絶好の書物として、また全国に誇る文化事業として発展し、ここに五〇周年を迎えた。その経過を辿ると原稿不足に遭遇するなど必ずしも平穏なものではなかつた。しかし、先人達は強い使命感によつてその難関を突破してきた。現在、出版界を取り巻く情勢は厳しいが、この群馬の文化遺産・知的財産ともされるみやま文庫は、県民有志がこれを継承・発展させなければならぬものと思考される。創刊五〇周年を記念したこの一文が何らかのお役に立てれば幸いである。